

# 現状維持バイアスによる予期的後悔の喚起が ハインドサイトバイアスの抑制に及ぼす影響

—コロナ禍における移動による感染に対する  
主観的リスクを指標とした実験的検証—

久保実乃里\*・沖林 洋平

The effect of arousing anticipatory regret due to status quo bias on  
suppressing hindsight-bias.  
-An empirical experiment using the subjective risk to infect due to touring  
in COVID-19 pandemic-

KUBO Minori\*, OKIBAYASHI Yohei

(Received September 22, 2022)

This study examined the influences of arousal of anticipatory regret by status quo bias on the suppression of hind sight bias. In this study, travel risk in situations of high risk of COVID-19 infection was considered a factor evoking anticipatory regrets, and population density in the area of residence was considered to affect subjective risk of infection for COVID-19. Considering that the experimental participants in this study were university students at a local university, three regions were selected as the evoked travel destinations: overseas countries, urban areas in Japan, and rural areas in Japan. The results of the bias analysis showed that anticipatory regret suppressed the hind-sight bias in the overseas condition, while anticipatory regret promoted the hind-sight bias in the rural condition.

**キーワード：**ハインドサイトバイアス, 予期的後悔, 現状維持バイアス, RAFTモデル, コロナ禍

**Key Words :** Hindsight-Bias, Anticipatory Regret, Status quo Bias, RAFT Model, COVID-19 pandemic

## はじめに

人は特に大きな問題がない限り、現状を維持しようとする傾向がある。この傾向は現状維持バイアス (Samuelson & Zeckhauser, 1988) と言われている。道家 (2018) は、現状維持バイアスについて、原発事故後のエネルギー政策に関する現状維持傾向の問題を挙げている。道家 (2018) は、原発事故直後の原発に対する国民の考えと原発事故から3年経過した時点の原発に対する考えの違いは、現状維持バイアスから生じているとしている。東日本大震災が起きた後の2011年4月に、電発は今後どうすべきかについて朝日新聞社が世論調査を実施したところ、原発の続行に対する賛成派が半数を超える56%であった。一方、原発事故から3年が経

過した2014年3月に実施した世論調査では、原発の再稼働について賛成派が28%、反対派が59%という結果となり、反対派が賛成派を大きく上回った。この結果を受け、道家 (2018) は、2011年の時点では原発が稼働した状態が「現状」であり、2014年の時点では、原発が停止した状態が「現状」となっているため、その現状を維持する傾向が見られたと結論付けている。2011年、2014年のいずれの調査でも現状維持派が多数を占めていることを考慮すると、調査において、現状維持傾向があることを示していると言えるだろう。

道家 (2018) は、“現状としての選択肢Aと、それと同じような選択肢だが、ある側面において選択肢Aよりも優れている選択肢Bがあった場合、現状の選択肢A

\* 下関市立生野小学校 山口県下関市幡生本町7-14 (yoki@yamaguchi-u.ac.jp)

の方が選択肢Bよりも高い確率で選ばれる現象”を現状維持バイアスと定義している。現状に満足しているため、現状維持の選択をすることには大きな問題はないが、現状変更の選択肢をとることで得られるべきはずのものを取り逃している状況は好ましくないと言える。現状維持よりも現状変更の選択をした方が望ましい結果が得られそうにも関わらず、現状維持選択を選好する (Kahneman & Tversky, 1982)。変革する社会において停滞をもたらす。そのため、道家 (2018) は、現状変更をした方が望ましい結果が得られる状況において現状維持の選択をしてしまう現状維持バイアスを問題として扱い、現状維持バイアスの低減方略について検討している。

後悔とはその名の通り、あとになって悔やむことであり、過去志向的な感情である。後悔は、「もし、～だったなら、もっとよかったのに」と考える上向きの反実思考を用いてメンタルシミュレーションし、選択しなかったものの想像上の結果と選択したものの結果を比較することで生じる (Kahneman & Tversky, 1982; Zeelenberg & Piter, 2006)。つまり、反実思考によって後悔は生じると言える。後悔と似た感情である落胆もまた、反実思考によって生じると言われているが (Zeelenberg, van Dijk, van Empelen & Reinderman, 1998)、後悔と落胆とでは、コントロール感と後の行動に与える影響において大きく異なる。後悔は、実際の結果と他の選択肢を選んだ場合に得られたであろう反実思考に基づく結果の比較から生じるのに対し、落胆は、実際の結果と事前に予期していた結果を比較して生じる感情である (道家・村田, 2009)。つまり、後悔においては、選ぶことができたが選ばなかった他の結果と選んだものの結果とを比較することによって生じているため、自分がその結果を引き起こしたというコントロール感が強く感じられる。ゆえに、どう行動したらうまくいったかがわかり、次に取るべき行動を考えたり、未来の類似状況で同様の失敗を回避したりすることができる。

後悔は、基本的には、物事が生じた後に生じる感情であることから過去志向的な感情であるが、未来の状況において、未来の失敗を回避しようと働きかける後悔については、未来志向的な感情とも言える (道家, 2018)。人は誰しも後悔しない意思決定をしたいと考える。そのため、「～の行動をとったら、～のような後悔をするだろう」といった未来志向的な後悔は、意思決定時における重要な指標であり、行動の変化をもたらす。この未来志向的な後悔を「予期的後悔」と言う (道家, 2018)。予期的後悔は、意思決定の前に意思決定者が行うメンタル、シミュレーションで将来の選択結果を想像しているときに感じられる後悔である。過去志向的な

後悔が、ある選択をしてそれが失敗であったと事後にわかり、「別の選択をしていればよかった」と反実思考したときに生じる感情であるのに対し、予期的後悔は、ある選択をする前のメンタル、シミュレーションの中で行われる反実思考により生じる (道家, 2018)。予期的後悔は、行動意思決定に働きかけ、後悔の量を最小化する選択を促す働きがある。すなわち、予期的後悔はリスク回避的な選択をさせる。

ハインドサイトバイアスとは、知覚や記憶の内容を取り入れて書き換える現象全体を指す。 (Kahneman, 2011; 下條, 2019)。ハインドサイトバイアスを最初に指摘したFishhoff (1975) は、結果を知った後で、あたかも事前に知っていたかのような錯覚に陥ることから、ハインドサイトバイアスを「私はずっと知っていた効果」と呼んだ。ハインドサイトバイアスは、人の記憶の整合性を保ち、記憶の因果的つながりを整理するために生じると考えられており、人間誰しもが持っている認知バイアスである。ハインドサイトバイアスにおいて、フィードバック (以下、「FB」) は非常に重要な役割を果たす。2つの選択肢から正解だと考える1つの選択肢を選び、その後、どちらが正しかったかのFBを受け、自分の以前の回答を思い出すという課題において、人はハインドサイトバイアスの影響を受ける場合がある。選択肢が正しかったかどうかに関するFBを受け取った後に、以前の回答を再構築する状況において適応されるモデルをRAFT (Reconstruct After Feedback with The best) モデルと呼ぶ (Hertwing, Farselow & Hoffrage, 2003; Hoffrage, Hertwing & Gigerenzer, 2000)。RAFTモデルで想定されている認知プロセスは以下の通りである。

RAFTモデルは思い出しのプロセスについて3つの過程を生み出している。1つめは、元の回答を記憶から検索できない場合には、問題を再び判断することで回答が再構築されることである。2つめは、再判断には、思い出すための手がかりと元の選択の基礎となるキュー値が含まれることである。3つめは、特に、不確かな知識はFBによって自動的に更新されることである。FBは元の回答の記憶の追跡に直接影響を与えるのではなく、再構築のプロセスのためのインプットとして使用される知識を変えることによって間接的に影響を与えるとされている。知識更新は、時間の経過とともに推論を改善できるため、ハインドサイトバイアスを引き起こす。

ハインドサイトバイアスは、意志決定者の評価に致命的な影響を与える。評価をする側は、決定に至るまでの過程が適切だったかどうかではなく、結果がよかったか悪かったかで決定の質を判断することになるからである。裁判に至る様々な事件、とりわけ医療訴訟などでは、被告である医者が責められるということが起こりがちであ

る（下條，2019）。

ハインドサイトバイアスが過度に生じると、事象の本質が見えないばかりか、客観的な判断ができず、不当に他者（意思決定者）を責めたり、過去に学ぶ機会を失ったりしてしまう。さらに、ハインドサイトバイアスは、イノベーションのきっかけを奪うことにもつながると考えられる。バイアスを正しく認識し（Kahneman, 2002）、出来事の結果に対して、「なるほど」「そうだったんだ」と思考することが新たな創造へと向かうモチベーションとなる。

そこで本実験では、日常的に見られるハインドサイトバイアスを低減させることを目的とした。ハインドサイトバイアスを低減させる課題を2つ行った。1つめは、参加者に反実思考をさせ、予期的後悔を抽出した（〇〇すると～の後悔をするだろう）ことである。反実思考は自我関与の働きかけである。記憶は、自分と出来事との関わり方の強さ、すなわち自我の関与の程度が高いほど定着するという考え方がある（沖林，2012）。したがって、反実思考をさせ、予期的後悔を喚起することで、参加者の記憶に関する自我関与度が高まり、元の回答を思い出す際の手がかりとしての記憶が残るため、後のFB情報にのみ惑わされずに判断ができる（ハインドサイトバイアスが減少する）と考えた。2つめは、再学習条件を設けたことである。元の回答を思い出す際に、「元の回答を作成した時の気持ちになって」回答するよう参加者に教示し、元の回答を作成した時の行動や気持ちを想起して回答するよう促した。そのため、再学習条件者は、回答を作成した時の行動、気持ちに沿って判断するため、後のFB情報にのみ惑わされずに判断ができる。

## 方法

**実験参加者** 本実験の参加者は、大学1年生から大学4年生までの82名（男性36名、女性46名）であった。反実思考と再学習の効果を検討するために4つの条件を設けた。反実思考あり条件×再学習なし条件に24名、反実思考あり条件×再学習あり条件に21名、反実思考なし条件×再学習なし条件に18名、反実思考なし条件×再学習あり条件に17名が参加した。

**材料** コロナウイルス感染者予測地域の選択肢、反実思考のためのコロナウイルス感染リスクに関するエピソード、予測後の思い出し課題時における地域の選択肢は、パワーポイントで提示した。

学習時は、学習時の時期のコロナウイルス新規感染者数とワクチン接種率が書かれた統計情報、2週間後の感染者数の予測用紙（多い方を予測）、反実思考のためのエピソード評定用紙、コロナウイルス感染リスク、移動欲求評定用紙を配布した。

テスト時は、結果のFB用紙（予測時から約2週間後のコロナウイルス新規感染者数）、2週間前の気持ちになって行う学習時の選択を想起した。コロナウイルス感染リスク、移動欲求（今行きたいか）評定用紙を準備し、参加者に配布した。

**倫理的配慮** 本研究への協力に同意した者を調査対象者とした。実験課題への回答は無記名であり、回答は任意であること、得られた情報については厳重に管理し、研究以外の目的では使用しないことを回答用紙の冒頭に記述した。

**手続き** 本実験は個別に行われた。学習時では、実験時のコロナウイルス新規感染者数とワクチン接種率を基に、2週間後のコロナウイルス新規感染者数が多いのはどちらの県/国かを選択させた。次に、反実思考あり条件の参加者は、コロナウイルス感染リスクに関するエピソードを提示され、自分だったらその地域に行ってもどのような後悔をするかを考えた。（6つの選択肢のうち、あてはまるものすべてに〇をする）一方、反実思考なし条件の参加者には、予期的後悔を生じさせないために数独をしてもらった。最後に、どちらの条件の参加者にも、コロナウイルス感染リスクと移動欲求（今その県/国に行きたいかどうか）を評定してもらった。学習時は、反実思考の効果を検討するため、反実思考あり条件と反実思考なし条件を設けた。学習時は具体的に以下の手順で実施した。

1. 近日のコロナウイルス新規感染者数、ワクチン接種率の書かれた用紙と近日のコロナウイルス新規感染者数が空欄となった用紙を配布した。

2. 参加者は、近日のコロナウイルス新規感染者数とワクチン接種率を確認した後、近日のコロナウイルス新規感染者数を空欄の用紙に書き写した。

3. 参加者は、近日のコロナウイルス新規感染者数とワクチン接種率を基に、スライドに表示された選択肢において、2週間後のコロナウイルス新規感染者数の多い方を予測した。（都市部5県、地方5県、海外5県の組み合わせ、計30問）

4. 参加者は、スライドに表示されたコロナウイルス感染リスクに関するエピソードを読み、エピソード評定（“私”はどのくらい後悔したか）を11件法（0：全く後悔しなかった～10：とても後悔した）で行った。（反実思考あり条件）

5. 参加者は、用紙に表示された10県と5つの国に自分が行った場合、どのような後悔をするかについて考え、あてはまるものすべてを選択（自分が感染してしまうかもしれない、自分が感染して周りの人に迷惑をかけるかもしれない、自分が感染して特定され、非難を浴びるかもしれない、周りの人が感染して、どこにも出られ



なくなってしまうかもしれない、感染者の少ない他の場所にすればよかったと思うかもしれない、コロナ感染対策実施により楽しめなかったと思うかもしれない)し、それぞれの地域に行った場合の後悔を11件法で評定(0:全く後悔しないだろう~10:とても後悔するだろう)した。(反実思考あり条件)

6. 参加者は、再び、2週間後のコロナウイルス新規感染者数が多いのはどちらかを予測した。(選択肢は3で提示したものと同様)

7. 参加者は、コロナウイルス感染リスク、移動欲求をそれぞれ11件法(リスク; 0全くない~10非常に高い、移動欲求; 0全く行きたくない~10とても行きたい)で評定した。

テストは、学習の2週間後に行った。参加者は結果のFB(どちらの県の新規感染者数が多かったか)を確認し、その後、2週間前に選択した自分の回答を思い出して選択した。最後に学習時同様、コロナウイルス感染リスク、移動欲求を評定した。テスト時では、再学習の効果を検討するため、再学習なし条件と再学習あり条件を設けた。

**結果**

本実験では、以前の自分の選択を思い出す際にFB情報に引きずられ、以前の自分の選択とは異なる選択(FB情報と同じ)をした回答をハインドサイトバイアスが生じた回答とした。FB情報による記憶の書き換えが見られた回答をハインドサイトバイアス1点とした。全体\*FBと同じ選択数/全体\*FBと違う選択数を算出したうえで自然対数を乗じたものをバイアス値とした。

反実思考あり条件と反実思考なし条件における移動による感染リスクと移動欲求 反実思考あり条件と反実思考なし条件における移動による感染リスクと移動欲求について平均値をTable 1に示す。移動による感染リスク

合計は、各県/国における感染リスク(0全くない~10非常に高い)を合計した値であり、移動欲求合計は、各県/国への移動欲求(今どの程度行きたいかの評定: 0全く行きたくない~10とても行きたい)を合計した値(10点×15県/国の150満点中)である。移動による感染リスク都市部は、15県や国のうち、兵庫県、北海道、福岡県、愛知県、神奈川県における感染リスクを合計したもの(10点×5県の50満点中)であり、感染リスク地方は、山形県、徳島県、長野県、福井県、佐賀県における感染リスクを、感染リスク海外は、スリランカ、タイ、イラン、オーストリア、アイルランドにおける感染リスクを合計したものである。移動欲求都市部、移動欲求地方、移動欲求海外についても感染リスク同様の県/国における移動欲求を合計した。

反実思考あり条件と反実思考なし条件における移動による感染リスクと移動欲求についてt検定を行った結果、感染リスク合計( $t(80) = 3.179, p < .01$ )、感染リスク地方( $t(79) = 2.970, p < .01$ )、感染リスク海外( $t(80) = 2.652, p < .05$ )で、反実思考あり条件となし条件に有意な差が見られた。感染リスク合計、感染リスク地方、感染リスク海外において、反実思考あり条件の方がなし条件よりも高く評定した。移動欲求に関しては、反実思考あり条件、なし条件に有意な差は見られなかった。

**予期的後悔の大きさと移動による感染リスク、移動欲求** 予期的後悔の大きさと感染リスク、移動欲求との関係を調べるために、相関分析を行った結果をTable 2に示す。予期的後悔の大きさを反実思考で行った、各県/国に行った場合の後悔を11件法で評定した値とし、各県/国に行った場合の後悔を合計した値(10点×15点満点中)を予期的後悔の合計とした。予期的後悔都市部は、15県や国のうち、兵庫県、北海道、福岡県、愛知

Table1  
各条件の反実思考の有無による平均値と標準偏差

	反実思考あり	反実思考なし
感染リスク合計	93.83(16.14)	82.74(14.90)
移動欲求合計 1	64.49(23.06)	58.20(24.90)
感染リスク都市部 1	33.38(6.41)	31.51(7.69)
感染リスク地方 1	20.47(8.51)	12.27(6.64)
感染リスク海外 1	39.98(6.93)	36.03(6.30)
移動欲求都市部 1	39.67(10.13)	36.31(13.03)
移動欲求地方 1	27.53(9.02)	24.88(9.30)
移動欲求海外 1	11.32(10.72)	11.09(9.34)

カッコ内は標準偏差

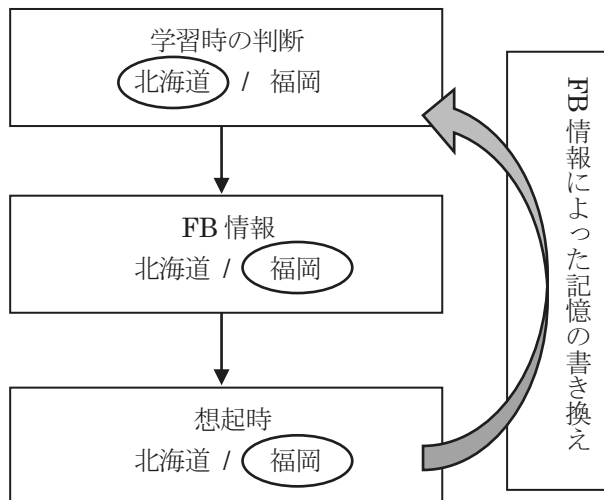


Figure1 本研究における実験課題成績とハインドサイトバイアスの関係

Table 2  
 予期的後悔の大きさと感染リスク・移動欲求

	予期的後悔の合計	予期的後悔都市部	予期的後悔地方	予期的後悔海外	感染リスク合計1	移動欲求合計1
予期的後悔の合計	1.000					
予期的後悔都市部	.803**	1.000				
予期的後悔地方	.868**	.815**	1.000			
予期的後悔海外	.492**	.564**	.371*	1.000		
感染リスク合計1	.398**	.287*	.420**	.209	1.000	
移動欲求合計1	-.005	-.040	-.006	-.020	-.260*	1.000

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

県、神奈川県における予期的後悔を合計したもの（10点×5県の50満点中）であり、予期的後悔地方は、山形県、徳島県、長野県、福井県、佐賀県における予期的後悔を、予期的後悔海外は、スリランカ、タイ、イラン、オーストリア、アイルランドにおける予期的後悔を合計したものである。

予期的後悔の大きさと感染リスク、移動欲求との関係を調べるために相関分析を行った結果、予期的後悔合計と感染リスク合計 ( $r = .398, p < .01$ )、予期的後悔都市部と感染リスク合計 ( $r = .287, p < .10$ )、予期的後悔地方と感染リスク合計 ( $r = .420, p < .01$ ) において相関が見られた。予期的後悔が大きいほど、感染リスク合計を大きく評定する傾向が見られ、特に地方における予期的後悔が大きいほど感染リスクを高く評定した。予期的後悔の大きさと移動欲求には相関が見られなかった。加えて、反実思考あり条件に限り、感染リスクと移動欲求に相関傾向が見られた。 ( $r = -.260, p < .10$ )

予期的後悔の種類と感染リスク、移動欲求 予期的後悔の中でも、どの後悔が感染リスク、移動欲求と関係しているかを調べるために、相関分析を行った結果を示す。

ハインドサイトバイアスにおける地域とバイアスの種類 地域とバイアスの種類を参加者内要因とする2要因分散分析を行った結果をFigure 2に示す。バイアス1は再学習時のハインドサイトバイアス量、バイアス2は想起時のバイアス量を示している。バイアス1とバイアス2それぞれを都市部、地方、海外に分け、地域とバイアスの種類を参加者内要因とする2要因分散分析を行った結果、地域の主効果 ( $F(1,14) = 11.843, p < .01$ ) とバ

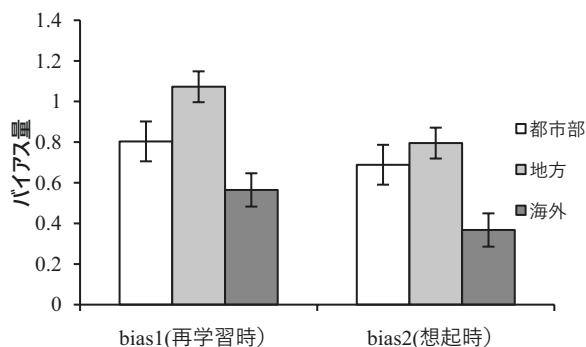


Figure 2  
 各地域におけるbias1 とbias2

イアスの種類の主効果 ( $F(2,28) = 23.814, p < .01$ ) が見られた。再学習時のバイアスは、地方は都市部より有意に大きく、 ( $t(14) = -2.860, p < .05$ )、都市部は海外より有意に大きかった ( $t(14) = .037, p < .05$ )。想起時のバイアスは、地方と都市部に有意な差は見られなかったが、地方、海外は海外より有意に大きかった。 ( $t(14) = 4.691, p < .01$ )、 ( $t(14) = 3.095, p < .01$ )。

バイアス2に関して2（反実あり/なし）×2（再学習なし/あり）の参加者間2要因分散分析を行った結果、海外の項目リストにおいて、反実思考の主効果が有意であり ( $F(1,61) = 4.206, p < .05$ )、地方の項目リストにおいては、反実思考の主効果の有意傾向が見られた ( $F(1,56) = 2.941, p = .092$ )。加えて、都市部 ( $F(1,53) = 3.108, p = .084$ )、地方 ( $F(1,56) = 3.189, p = .080$ ) の項目リストにおいては、再学習の主効果の有意傾向が見られた。組み合わせにおいては、海外 ( $F(1,61) = 3.647, p = .061$ ) と地方 ( $F(1,56) = 3.571, p = .064$ ) の項目リストで、再学習あり条件における反実思考の単純主効果の有意傾向が見られた。すなわち、地方の項目リストにおいては、反実思考あり条件の方がなし条件よりもバイアスが大きい傾向があった。Figure 4（地方）にみられるように、反実思考あり×再学習あり条件は反実思考なし×再学習あり条件よりもバイアスが大きい、Figure 5（海外）にみられるように、反実思考なし×再学習あり条件は、反実思考あり条件×再学習あり条件よりもバイアスが大きい。

考 察

本実験の目的は、予期的後悔の喚起がハインドサイトバイアスを低減させることを実証することと、予期的後悔がコロナ禍における感染リスクや移動欲求にどのように影響するか（予期的後悔の効果）を実験的に検討することであった。

まず、予期的後悔がコロナ禍における感染リスクや移動欲求にどのように影響を与えたのかについて記述する。反実思考あり条件と反実思考なし条件における移動によ

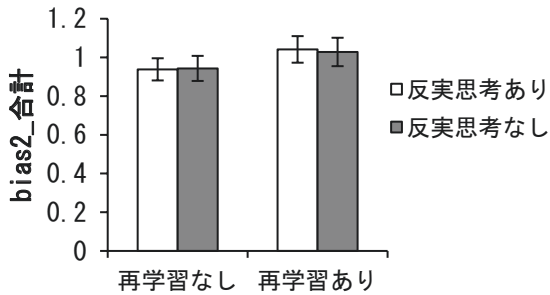


Figure 3 合計バイアス値と反実思考、再学習の関係

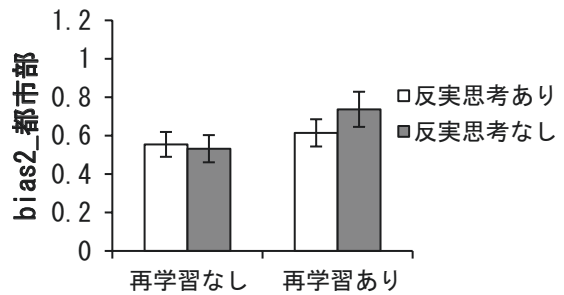


Figure 4 都市部バイアス値と反実思考、再学習の関係

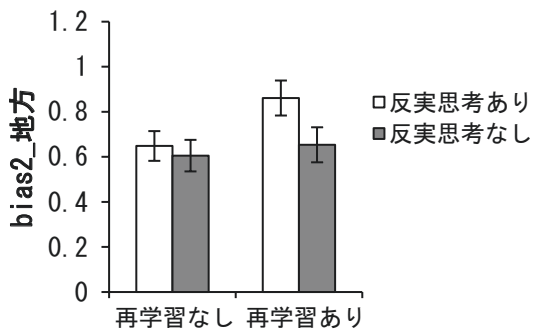


Figure 5 地方バイアス値と反実思考、再学習の関係

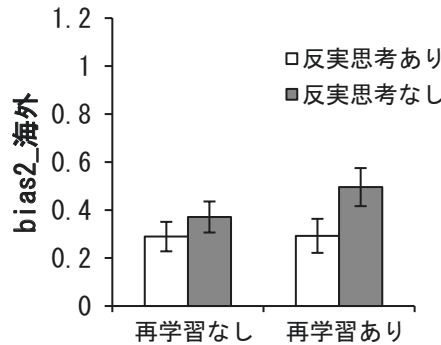


Figure 6 海外バイアス値と反実思考、再学習の関係

る感染リスクと移動欲求について平均の差の検定を行った結果、感染リスク合計、感染リスク地方、感染リスク海外において、反実思考あり条件となし条件に有意な差が見られた。感染リスク合計、感染リスク地方、感染リスク海外において、反実思考あり条件の方がなし条件よりも高く評定した。また、テスト時における感染リスクと移動欲求の評定に関しても反実思考あり条件の方がなし条件よりも感染リスクを高く評定する結果が得られた。この結果から、反実思考をすることで予期的後悔が高まり、感染リスクを高く見積もることが示された。加えて、2週間前に行った反実思考が2週間後に行われたテスト時における感染リスクの評定に影響することから、参加者は、2週間前に考えた予期的後悔を覚えていたことが考えられる。あるいは、学習時にて反実思考あり条件であった参加者が、予期的後悔をきっかけに、特に感染者数の多い都市部や海外における感染リスクに敏感になり、テスト時の感染リスクを高く見積もったとも考えられる。一方で、移動欲求については、反実思考あり条件、なし条件とで有意な差は見られなかった。反実思考が移動による感染リスクを高めても、行きたい気持ち（移動欲求）にまでは影響しないことが示唆された。

続いて、予期的後悔の大きさが感染リスクや移動欲求にどのように影響するかについて検討する。予期的後悔の大きさと感染リスク、移動欲求との関係について反実思考あり条件に絞り、相関分析を行った結果、予期的後悔合計と感染リスク合計、予期的後悔都市部と感染リスク合計、予期的後悔地方と感染リスク合計において相関が見られた。予期的後悔が大きいほど、感染リスクを高く評定する傾向が見られ、特に地方に対する予期的後悔が大きいほど感染リスクを高く評定した。この結果から、予期的後悔が大きいほど感染リスクを高く見積もることが示された。加えて、感染リスクと移動欲求にはわずかながら負の相関が見られたことから、反実思考あり条件に限り、感染リスクを高く評定するほど移動欲求が低下する傾向にあることも示唆された。したがって、予期的後悔は、感染リスクを高める効果はあるが、コロナ禍における移動欲求にまでは影響しないことが考えられる。以上の、反実思考あり条件となし条件における感染リスクと移動欲求についての平均の差の検定と、予期的後悔の大きさと感染リスク、移動欲求との関係の結果から、反実思考によって高まった予期的後悔が感染リスクを高く評定させることにつながるということがわかった。しかし、いずれの結果も移動欲求との関係が見られず、反実思考によって現状変更（＝居住地とは離れた地域へ行く）に関する予期的後悔が高まり、現状維持（他の地域に行きたくない気持ち）の傾向が強まる“現状維持バイアス”は確認できなかった。

悔合計と感染リスク合計、予期的後悔都市部と感染リスク合計、予期的後悔地方と感染リスク合計において相関が見られた。予期的後悔が大きいほど、感染リスクを高く評定する傾向が見られ、特に地方に対する予期的後悔が大きいほど感染リスクを高く評定した。この結果から、予期的後悔が大きいほど感染リスクを高く見積もることが示された。加えて、感染リスクと移動欲求にはわずかながら負の相関が見られたことから、反実思考あり条件に限り、感染リスクを高く評定するほど移動欲求が低下する傾向にあることも示唆された。したがって、予期的後悔は、感染リスクを高める効果はあるが、コロナ禍における移動欲求にまでは影響しないことが考えられる。以上の、反実思考あり条件となし条件における感染リスクと移動欲求についての平均の差の検定と、予期的後悔の大きさと感染リスク、移動欲求との関係の結果から、反実思考によって高まった予期的後悔が感染リスクを高く評定させることにつながるということがわかった。しかし、いずれの結果も移動欲求との関係が見られず、反実思考によって現状変更（＝居住地とは離れた地域へ行く）に関する予期的後悔が高まり、現状維持（他の地域に行きたくない気持ち）の傾向が強まる“現状維持バイアス”は確認できなかった。

海外の項目リストでは反実思考あり条件の方がなし条件よりもバイアスが有意に小さく、反対に、地方の項目リストでは反実思考あり条件の方がなし条件よりバイア

ス大きい傾向にあった。海外の項目リストにおける反実思考は、ハインドサイトバイアスを抑制し、一方、地方の項目リストにおける反実思考は、ハインドサイトバイアスを促進した。同じ反実思考でありながら、その効果が真逆に働いてしまった原因として、参加者の自己関連づけの程度に違いがあるのではないか。自己関連づけの程度とはある事柄を自分に関連づけて意識することであり、自我関与である。参加者の出身地の大半は日本の地方であり、海外と地方では、参加者の自我関与度が異なる。自我関与度が比較的低い海外などのテーマに関する反実思考は、FB情報に影響を受けず、「学習時に反実思考をした際の後悔感情」が、自分の回答を思い出す手がかりとして働いたが、自我関与度が高い地方のような場合は、参加者の「間違えたくない」「正解して当然だ」という気持ちを引き出してしまい、「学習時に反実思考をした際の後悔感情」がFB情報に影響を受けてしまったことが考えられる。自我関与度が高い場合には、反実思考はハインドサイトバイアスを促進する。

#### 引用文献

- 道家瑠見子 (2018) . 現状維持からの脱却, 一橋大学審査学位論文 (未公開), pp.1-142. <https://hermes-ir.lib.hit.ac.jp/hermes/ir/re/30426/soc020201702503.pdf> (最終閲覧日2022年9月22日)
- 道家瑠見子・村田光二 (2009) . 後悔の過大推測: ネガティブFB直後と時間経過後の予期的後悔と経験後悔, 実験社会心理学研究, 48 (2), 150-158.
- Fishhoff, B. (1975) . Hindsight is not equal to foresight: The effect of outcome knowledge on judgment under uncertainty. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 1 (3), 288–299.
- Hertwig, R., Fanselow, C., & Hoffrage, U. (2003) . Hindsight bias: How knowledge and heuristics affect our reconstruction of the past. *Memory*, 11, 357-377.
- Hoffrage, U., U., Hertwig, R., & Gigerenzer, G. (2000) . Hindsight bias: A By-Product of Knowledge Updating?. *Journal of Experiment Psychology : Learning, Memory, and Cognition*, 26 (3), 566-581.
- Kahneman, D (2002) . *Novel Prize Lecture and other essays*. The Novel Foundation. (カーネマン, D, 友野典男 (監訳), 山内あゆ子 (訳) . (2011) , *ダニエルカーネマン心理と経済を語る*, 楽工社)
- Kahneman, D. (2011) . *Thinking, fast and slow*. New York, Farrar, Straus and Girous. (カーネマン, D 村井章子 (訳) . (2012) . *ファスト&スロー あなたの意思はどのように決まるのか?* (上) (下) 早川書房)
- Kahneman, D., & Tversky, A. (1982) . The Psychology of Preferences. *Scientific American*, 246, 160-173.
- 沖林洋平 (2012) . IATと情動知能, 記憶の自伝的精緻化の関連, 日本認知心理学会発表論文集, 53.
- Samuelson, W., & Zechhauser, R. (1988) . Status quo bias in decision making. *Journal of Risk and Uncertainty*, 1, 7–59.
- 下條信輔 (2019) . 潜在認知の次元-しなやかで頑健な社会をめざして-, 有斐閣.
- 山祐嗣・秋田真志・川崎拓也 (2017) . 水の濁り判断と射流洪水の確率判断における後知恵バイアス—裁判の証言のための検証実験, 日本認知心理学会発表論文集, 4-5.
- Zeelenberg, M., van Dijk, W.W., van der Pligt, J., Manstead, A. S. R., van Empelen, P., & Reinderman, D. (1998) . Emotional Reactions to the Outcomes of Decisions: The Role of Counterfactual Thought in the Experience of Regret and Disappointment. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 75 (2), 117-141.